# みんなに公平か、あるいは公正か？

国際ロータリー第2510地区
パストガバナー　小林　博
（札幌北RC）

「４つのテスト」の２番目に「みんなに公平か？（Is it fair to all concerned?）」というのがあります。

「公平」というと「みんなに平等にしているか」というように聞こえてきます。ところで４つのテストの「fair」の真意はみんなに「公平」ではなく、「公正」という意味ではないでしょうか？

例えばスポーツの「フェアプレー」は正々堂々、不正をしない、ということが公正の意味なのです。ですからfairは「公平」ではなく、本来「公正」と訳したほうがよかったのでなかったか。蛇足ながら「**公正**取引委員会」というものがありますが、「**公平**取引委員会」というのはありません。

ところが、辞書によれば「公平」という言葉のなかに「公正」という意味合いも入っているようですから、公平という言葉が間違っていたわけではありません。ただ、直感的には「公平」より「公正」の方が適切な言葉でなかったかと思うのです。

単に言葉の問題ですから大事なことではありません。ただ私達が歌う「みんなに公平かどうか」のなかに、少なくとも「みんなに**公正**かどうか」の意味合いが強く入っていることを承知いただきたいと思います。

時代は変わりました。４つのテストが出来てから凡そ９０年経ちます。世のなか人間の尊厳とか人権問題がクローズアップされてきました。さらには多様性を尊重する風潮も高まってきました。「４つのテスト」の作られた時代には、そういうことが問題になったことは恐らくなかったでありましょう。

ところがいまは違います。どんな人でも、人種・性別・年齢に関係なくこの世に生を受けた以上、すべての人が生きる権利、つまり人間として当然の基本的な「人権」があります。人権尊重の精神はいま世界の大きな動きになっています。さらにはマイノリティの人達に対する公平な対応も要求されるようになってきました。全ての人が平等に、公平な人権が与えられるべきものだからです。

したがって、４つのテストの日本語への翻訳にあたって、むかし英語の「fair」を「公正」ではなく「公平」と訳したのも、恐らく数１０年先の「現在」の人権問題、多様性の尊重をも先読みされた先人の鋭い感性と英知があったからでなかったか、といま改めて感服している次第です。